

富山市立図書館

# 図書館だより

第44号  
2011.2

## ひろがる児童サービス

### 地域へ出向いた活動紹介

平成 21 年 10 月の「富山市子ども読書活動推進計画（第二次）」( 1 )策定から、1 年あまりが経過しました。

図書館では、「児童サービスの充実」「児童サービスを専門とする図書館司書の養成」「読書環境の整備」「関係機関との連携」「ボランティア団体との協働」の 5 つの方策を柱に、さまざまな活動を展開しています。

図書館の活動というと、一般的に図書館内で行っているサービス（資料の収集、貸出、読書相談、行事、展示、広報物の発行等）をイメージしますが、図書館外でもさまざまな活動を行っています。

その一つは、図書館司書が、学校や保健福祉センター、公民館など、図書館以外の場所を訪れて行っている読書啓発活動です。このような活動は、今年度だけで 146 回行ないました。

今回は、図書館が市内の学校や保育所、幼稚園、市の各種機関、ボランティア等と連携をとりながら行っている活動について、平成 22 年度の内容を中心に紹介します。

### 1. 学校訪問

小学校 1・2 年生を対象に、富山市内の 54 校の各教室に図書館司書が出向き、ブックトーク( 2 )やストーリーテリング( 3 )を実施しています。

ブックトークでは、いろいろな本の魅力を伝え、読書へ導くきっかけづくりを行っています。また、ストーリーテリングでは、耳からおはなしを聞くことで、想像力豊かに物語の世界を味わう楽しさを伝えています。学校訪問を通じて、読書の楽しさを伝えるとともに、図書館が身近な施設であることを知る機会になるよう努めています。

このほかに、2 年生では、クラスごとに図書館へ来て施設を見学したり、利用の仕方を学ぶ「学級招待」という行事もあります。



蜷川小学校での学校訪問の様子

1 富山市立図書館 HP ( <http://www.library.toyama.toyama.jp/> ) 「運営情報・方針」より閲覧することができます。

2 子どもや成人の集団を対象に、あらすじや著者紹介などを交えて、興味がわくように本の内容を紹介すること。

3 話し手が題材となるお話を覚え、聞き手に語り聞かせること。

## 2. 市役所出前講座「絵本を楽しむ」

市役所出前講座とは、市役所の職員が、市内のグループや団体の希望に応じ、各担当のテーマで講座を行うものです。

図書館は「絵本を楽しむ」という講座名で、図書館司書が絵本の紹介や読み聞かせを行っています。平成22年度は9団体から希望があり、288の方が参加されました。幼児を持つ保護者グループからの要請が多く、年齢に応じた絵本との関わり方や選び方、親子で絵本を楽しむことの意義など、実際に絵本の読み聞かせを交えて説明しています。

講座では、絵本を読んでもらっている子どもの反応や絵本に見入る姿に驚かれる方が多く、絵本の読み聞かせの大切さを伝える講座となっています。

新保公民館での出前講座の様子



親子サークルで紹介する本とリスト

## 3. 親子サークル「絵本の楽しみ」

富山市こども福祉課が実施している子育て支援事業の親子サークル(市内保育所・保育園)に、図書館司書が出向き、絵本の紹介、読み聞かせ、手遊びなどを行っています。

保育所の近くの図書館を会場にし、絵本について話した後、実際に絵本を手にとって選んでいただき、貸出も行っています。今年度は18の親子サークルが利用され、312人が参加されました。

## 4. 仲間づくりの赤ちゃん教室

市内の保健センターが開催する赤ちゃん教室の際に、乳児とその保護者に、絵本の紹介、読み聞かせ、わらべうた、手遊びなどを行っています。

また、赤ちゃん向けに書かれた絵本を紹介し、選び方の相談にもなっています。

赤ちゃんに絵本は早すぎるのではと思われる方もいらっしゃいますが、遊びの延長として赤ちゃんと一緒に絵本を楽しむ、親子の絆を深めていくことを伝えています。

今年度は、4箇所で開催し、親子36組80人が参加されました。



富山市北福祉センターでの赤ちゃん教室の様子

## 5. おはなしワールド

毎年、「子ども読書の日」(4月23日)に、司書とボランティアが、市内の保育所・幼稚園を訪問して、おはなしの世界の楽しさを伝えています。今年度は、27箇所、1,218人の参加がありました。

大型絵本や紙芝居、手あそびなど、担当者が工夫してプログラムを考えます。どの会場でも子どもたちが楽しみに待っています。

このような活動を行うために、児童サービスを担当する図書館司書の役割は重要です。当館では、司書が児童サービスを行ううえで必要な専門知識と技術や経験を身につけるため、日ごろから研修や自己研鑽を重ね資質の向上に努めています。

今後も関連機関との連携を図りながら、継続的に活動に取り組んでいこうと考えています。

(本館 田中)

# 新訳でつなぐ過去と未来

近年、外国文学の新訳やその見直しが盛んに行われています。作家の池澤夏樹氏が編集する『世界文学全集』が好評を博し、また『超訳ニーチェの言葉』など、難解な思想を大胆に翻訳して編集したのも話題となりました。

ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』からの一部分で新旧の翻訳の違いを比較してみると、次のようになります。

「何よりも一ばん、あわれな修道士を驚かしたのは、フェラポンドが疑いもなく極度の精進をして、しかもかなりの高齢にもかかわらず、見かけたところ矍鑠として背の高い老人で・・・」（米川 正夫 / 訳「世界文学全集 第18巻」 河出書房新社 1968年）

「この哀れな修道僧を何よりおどろかせたのは、長身の老人であるこのフェラポンド神父が、まぎれもない厳しい精進の行をかさね、しかもこれほどの高齢にありながら、見たところ頑健そのもので・・・」（亀山 郁夫 / 訳「カラマーゾフの兄弟」 光文社古典新訳文庫 2007年）

新訳された文章を過去に訳されたものと比較すると、普段使う言葉に近い文章になっていることがわかります。また、登場人物のセリフも堅苦しい言葉からより身近な話し言葉へと変化しています。同じ作品でも翻訳した訳者や時代による違いで、その印象は大きく変わるといえるでしょう。中でも文語体と口語体の文章ではその違いが明白です。

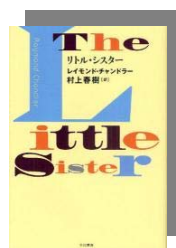


『口語訳 即興詩人』  
安野光雅 / 口語訳  
アンデルセン / 原作  
山川出版社 2010

『即興詩人』は森鷗外の、美文調の文語体の翻訳で有名な作品ですが、一方では「文語文が難しい」

として敬遠されがちでした。そこで現代の読者に改めて手にとってもらうために、過去に画文集『絵本即興詩人』の著作のある安野氏が、5年の歳月を費やして口語体の文章に翻訳し直したのがこの作品です。安野氏の口語訳により、19世紀の恋物語が新たな光彩を放ちます。この作品の舞台となったイタリアを巡って描いた前出の画文集と合わせて、さらにその世界を楽しむこともできます。

作品に対する愛着から新たな翻訳を試みた作品は他にも多くあります。



『リトル・シスター』  
レイモンド・チャンドラー /  
著 村上 春樹 / 訳  
早川書房 2010

この作品も昨年、半世紀ぶりに新訳された作品です。チャンドラーの作品の中では比較的评价が低い作品とされていますが、訳者である村上氏が「愛おしい作品」とし、翻訳を熱望したそうです。氏が「何度も熟読した」と言うだけあって、探偵であるマーロウと依頼人のオーファメイとのやりとりが、生きいきと表現されています。

私たちが外国文学をより身近に楽しむことができるのは翻訳家のおかげともいえますが、その翻訳家について知ることができるのが『翻訳家列伝101』（小谷野 敦 / 編著）です。この本では日本人の翻訳家101人が登場し、手がけた作品の紹介と、翻訳家の人となりがあわせて紹介されています。彼らの挫折と奮闘から見える素顔や、古典の名作を新訳して出版することの難しさについてもふれることができます。

新訳という作業は、古典作品に新たな命を吹き込み、次代につなぐ役割を担っています。翻訳者の作品に対する愛情や努力に思いをはせながら、新訳を楽しんでみてはいかがでしょうか。（本館 山木）

# レファレンスあれこれ

**Q.** 公共トイレを改善するための、全国各地および富山県内での取り組み事例や、公共トイレの利用者アンケートが掲載された資料はあるか。

**A.** 当館の蔵書を、本の内容を表す件名(この場合は「便所」)で検索したところ、以下のような資料があった。公共トイレの改善と、それにとともなうイメージの変化が注目されていることがうかがわれる。

『まちづくりにはトイレが大事』(北斗出版 1996)によると、日本では 80 年代半ばから「トイレブーム」が起こり、公共トイレも“4K”(汚い、暗い、臭い、恐い)のイメージを払拭するべく「トイレ革命」が進行してきたということだ。トイレ改善の流れや課題などがわかりやすくまとめられた本である。

『公共トイレ管理者白書 もう公衆便所なんて呼ばせない』(オーム社 2005)は、静岡県伊東市の「観光トイレ」、東京都町田市の「バリアフリートイレ」など、各地の特色あるトイレ作りの事例を紹介している。また資料編の「公共トイレ年表」には、1988 年に富山県が「快適な公共トイレ整備事業」に着手したことも記載されていた。

『心に響く空間 深呼吸するトイレ』(弘文堂 2009)では、商業施設、学校、駅などのトイレが、多数のカラー写真とともに紹介されている。県内からも、滑川市立西部小学校とマリエとやまのトイレが掲載されていた。また、「トイレだけの目的で来店したことがありますか?」といった利用者アンケートの結果が、随所に盛り込まれている。

「トイレ アンケート」などのキーワードで、

インターネットから関連情報を検索すると、第一生命経済研究所が 2004 年に実施した「公共トイレに関するアンケート調査～利用者からみた公共トイレの管理と利用のあり方～」が公開されていた。これは同研究所の調査報告書「ライフデザインレポート」2005 年 5 月号・11 月号をもとにしたもので、どちらも HP(1)から全文を閲覧できる。

また、トイレ環境の改善や整備に取り組む日本トイレ研究所の HP(2)では、地方自治体との共催で行っている「全国トイレシンポジウム」の資料集などの出版物を紹介している。

次に、富山県での取り組みについて知るため、県庁の HP 内を「公共トイレ」というキーワードで検索をしたところ、「誰もに住みたい県、そして訪れたい県に」～「富山県快適トイレ推進プラン」を推進する!という記事があった。県の政策情報誌「でるくい」22 号(2005)に掲載されたもので、1988 年に始まった県の公共トイレ改善事業について、環境政策課の職員が解説している。グッドトイレコンテストなどとともに、この記事でも紹介されているのが、県と環日本海トイレフォーラムが協働で作成した「富山県トイレマップ」(3)である。web 上で公開されており、県内の主な公共トイレを検索できるユニークなものだ。

さらに、富山県立図書館の蔵書を検索すると、『公共トイレに関するアンケート実態調査結果』(富山県 1988)、『望ましい公共トイレのあり方』(富山県快適な公共トイレ研究会 1989)など、県のトイレ行政に関わる資料を所蔵していた。また、より新しい情報については、県環境政策課や環日本海トイレフォーラムなどへの問い合わせを質問者におすすめた。(本館 海野)

1 第一生命経済研究所 HP <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/ldi>

2 日本トイレ研究所 HP <http://www.toilet.or.jp/>

3 富山県トイレマップ <http://www.toyama-toiletforum.jp/>